

研究成果の紹介

大豆の機械収穫直前に使用する除草剤

大豆をコンバインで収穫する際に雑草が繁茂していると、雑草の汁液による汚粒が発生する。そこで、大豆収穫前に非選択性除草剤を散布して雑草を枯殺することにより、汚粒を減少させることができた。

内容

大豆栽培を大規模に行うためには作業の機械化が必要となる。収穫作業においてもコンバインが使用されるが、圃場に青立ち株や雑草が繁茂していると、収穫の際に大豆粒が雑草等にこすりつけられ、汁液による汚粒が発生することが問題となっている。そこで、大豆収穫前に圃場全体に非選択性除草剤を散布して雑草を枯殺することにより、汚粒の原因となる雑草の水分含量を低下させることができることを確認した。

試験は、2011年に場内の大豆栽培圃場（品種「サチユタカ」）で行った。試験圃場では除草を行わず、故意に雑草を繁茂させた。主要な雑草はシロザで発生量は $516.7\text{g}/\text{m}^2$ 、その他の草種は合計 $111.5\text{g}/\text{m}^2$ であった。

薬剤は、ラウンドアップマックスロード（グリ

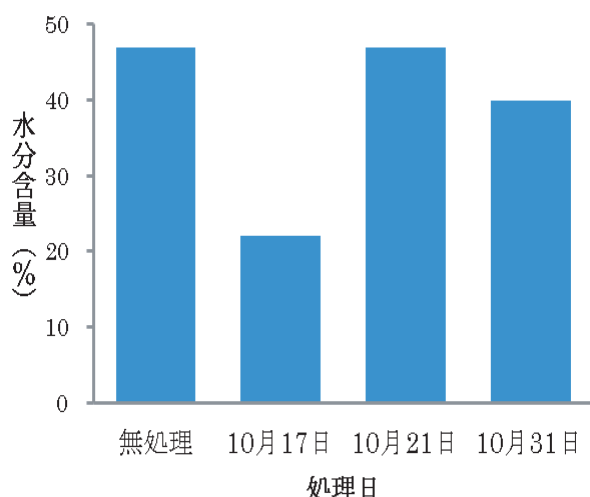


図 除草剤散布によるシロザの水分低下

ホサートカリウム塩48%)を供試し、全面茎葉散布した。処理時期は、10月17日と10月21日、10月31日とし、雑草水分含量の調査はシロザで行い、その試料は11月17日に採取した。

その結果、10月17日に処理した場合には枯殺効果が発現し、明確に水分含量が低下したが、10月21日及び10月31日処理では水分含量が十分に低下せず、効果発現までには時間を要することが明らかとなった（図）。

翌2012年、汚粒の発生に対する影響を調査した。雑草の繁茂した大豆栽培圃場で11月2日（大豆成熟期）に全面茎葉散布を行い、11月28日にコンバイン収穫を行ったところ、汚粒の減少が認められた（データ略）。

普及上の注意事項

現在、大豆収穫前の除草剤として登録されているのはラウンドアップマックスロードのみであり、使用時期は、大豆落葉終期～収穫14日前である。

本剤は低温期には効果発現が遅いため、落葉終期に散布しても収穫適期までに殺草効果が現れない場合がある。そのため、処理時期の気温が低くなる晩生品種には不適である。また、散布時期が早すぎると、収穫物に薬害（着色粒）が発生することがあるので注意が必要である。

山元 義久（農産園芸部）

（問い合わせ先 電話：0790-47-2410）